
皆伝

ゆめうつつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皆伝

【Nコード】

N2261E

【作者名】

ゆめうつつ

【あらすじ】

十六年もの間、師匠である臥龍齋ぶくりゅうさいと共に山中で暮らし、剣の修行をする少年、咬陀。最後の試練は何と、育ての親との死闘！哀しみの果て、彼は山を降りて行く。

（前書き）

クリエーターズ同盟さんの『回路解放！』に投稿したものを転載するに当たり、加筆修正しました。

「何故……ですか」

俺は今、養父でもある臥龍斎師匠と対峙していながら、戸惑いを隠せないでいた。

「問答無用。儂を殺さねば、お前が殺されるのみ……」

今までの十六年間で嘘のように、冷徹な気迫が師匠を包んでいる。俺は赤児の時に、この山へ棄てられていた。と師匠から聞いている。

記憶の中の師匠は厳しくも暖かく、何より優しくかった。両親のいない僕にとっては、ただ一人の身内である。慕い、敬ってきた師匠を殺すなんて出来る訳がない。

不意に何かが頬を掠めた。

次第に熱く疼き、滲み出たソレは顎を伝って滴り落ちる。

触れた指先は滑り、金属に似た特有の香りが鼻腔をくすぐる。

「血……」

刀が頬を切り裂いたのだ、と気づくのに刹那を要した。

「咬陀よ。」

死合いの最中、物想いに耽るようでは、お主、死ぬるぞ」

本気だ……。

全身の皮膚が粟立ち、背筋が冷たいモノで波打つ。

戦慄。でも、それだけではない。体奥から込み上げる昂揚感。

深く大きく一つ息を吐き、覚悟を決める。

そうすると不思議なもので、あらゆる雑念は消え、自分でも信じられないほど落ち着いてきた。

乱れていた息が整い始め、汗が引いていく……。

俺は刀を構え直し、気迫を込める。

そして再び、真っ向から対峙した。

「やれやれ。やっと、その気になりおったか」
言葉と共に、師匠の氣勢が増す。

互いに隙がなく、動けない。そのまま睨み合うこと数合。

先に動けば殺られる！

念^{おも}いが焦りを生み、次第に重く押し掛かる。

微動だに出来ない体を、またしても汗が流れていく。

滝のように幾筋も……。

だが、それは師匠も同じらしい。

勝負は一瞬。多分、一太刀で終わるだろう。

ふと、師匠の顔から陰が消えて、代わりに笑みが浮かぶ。

それを見て、ほんの僅か、俺の気が緩む。

その隙を突いて、師匠が裂帛の気合を込めて動いた。

一呼吸、有るか無いか。

刃、一閃。師匠は突きを、俺は反射的に抜き胴を放ち、互いの位置を入れ替わる。

俺は、そのままの姿勢で暫く動けなかった。恐らく師匠も……。

数瞬のち。左肩に痛みを、次いで血飛沫が僅かに上がる感触を覚える。

「見事だ。咬陀よ……」

背後で師匠の声が聞こえ、床に重い物が叩きつけられる音が響く。

俺は、眼から溢れゆく涙を抑えられなかった。

切っ先は、肉が裂ける鈍い手応えを確かに伝えていた。

手が……腕が……震えて止まらない。

緊張と恐怖で硬く強張り、自分の物とは思えないほどに重く、ま
まならない体を必死で動かして振り向き、師匠の元へ歩み寄る。

跪き、師匠の体を注意深く抱き抱える。

大量の……ヌルリとした血の感触は、師匠が助からないだろうこ
とを予感させた。

「師……」

師匠、と叫びたいのに悲しみや後悔や諸々の感情で喉が詰まって、
言葉が出ない。

「強く……なりおつたな。咬陀よ……」

俺の声を聞いてか、師匠が眼を開け、話しかけて来た。

「師……」

俺は、そう言いかけて首を振る。

「親……父……死ぬ、な……死なないでくれええっ！ 親父いつ！」

俺の叫びに師匠……いや、育ての親父は驚いたように眼を見張る。
ほんの一瞬だけ。

それから、フツと力なく相好を崩した。

「儂を……親父、と……呼んでくれるか……」

初めてだな。と呟く親父の眼に、涙が浮かんでいた。

「思えば、十六年……。何、一つ……父親、らしいこと……してや
れな……かった、な……」。

赦、して……くれ、咬……陀。

それと……いつの……間にか、大きゅう……なりおつて。儂は、
嬉……しい……ぞ」

ゼイゼイと荒い息を吐く合間に喋る親父。
その呼吸が次第に浅く、速くなっていく。

小さい頃の想い出やら何やらが蘇り、俺の口から知らず知らずの内に嗚咽が漏れる。

「親父……親父……まだ、逝くな。俺……まだ一緒に暮らしたい。剣の師匠じゃなく、親父として……」

眼を閉じゆく親父の意識を、何とか繋ぎ止めようと、俺は必死で呼び掛けた。

「そう……か……。済まん……。それ、と……。今まで……。ありがとう、な。咬陀……。免許……皆……伝……じゃ……」

血に塗れた右手が一度だけ、俺の頬を優しく撫でた後、力なく地に落ちる。

「お、親父？ ……親父いいっ！」

山々に響き渡るが如く、俺の絶叫が辺りに木霊した。

俺の願いも空しく、ニコリと安らかな微笑みを浮かべたまま、親父は……逝ってしまった。

哀しみに打ちひしがれながらも親父の身边を整理すると、秘蔵の酒と共に、俺宛の手紙が見つかった。

読んでみると、生前 多分、最後の修行の前だろう に書いたものらしい。

『咬陀よ。もし、これを読んでいたのなら、お前に免許皆伝を授けた儂は、生きて居らんだろう。』

だがな、咬陀。驕るでないぞ。

己より強い者は、この世に幾らでも居る。

精進を怠れば生き残ることなど、あたわぬじやろう。

用心せいよ。

しかし、儼にも少しばかり心残りがある。

それは、お前に父親らしいことを何一つ、してやれなかったことじゃ。

せめて、一緒に酒を酌み交わしたかったのう」

抑えていた涙が溢れ出し、文字を滲ませる。

「親父……死んでからの孝行で、本当に申し訳ない」

俺は親父の亡骸に、そう前置きすると、俺と親父の分の茶碗を二つ用意して、親父秘蔵の酒の封を切った。

それから、一つを亡骸の前に置き、もう一つを手を取って、それぞれに酒を注ぐ。

そして、死に水代わりに酒で親父の口許を湿してやり、俺は生まれて初めて口にする酒を一気に^{あお}呷る。

喉がカラカラとあつくなり噎せた。

噎せながら大声で泣いた。泣きながら酒を呑み、また噎せた。

何度か繰り返すと、漸く落ち着いて呑めるようになった。

親父を土に埋め、また酒を呑み、独り言のように親父との想い出を語る。

そうして一晩、呑み明かした。夜が白む頃には親父との別れを終え、眠りに就いていた。

目が覚めてから俺は、親父であり師匠であつた臥龍斎の刀を形見として携え、山を降りる。

ただ一度。足を止め、頂上を振り仰いで親父に誓う。

「俺……親父が伝えてくれた剣術で、きつと国一番の剣豪になる。待っててくれよ、親父！」

「達者でな、咬陀……」

背を向けて再び歩き出した時、俺を見送る親父の声を聞いた気がした。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2261e/>

皆伝

2010年10月10日07時17分発行